

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2012～2015

課題番号：24683033

研究課題名(和文)「個人の歴史経験」と「学校歴史」に着目した児童の歴史理解に関する実証的研究

研究課題名(英文) Research on students' idea about past focused on personal experience and school curriculum

研究代表者

田口 紘子 (Taguchi, Hiroko)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：10551707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童の歴史理解の形成や変容の原因を、「学校歴史」(授業で習得がめざされる歴史)と「個人の歴史経験」(個人が保持している歴史)に注目して解明し、児童の歴史理解を促進する学校歴史教育のあり方を考察するものである。体系的に歴史を学ぶ前の3・4年生や、通史的に歴史を学び終えた6年生への事例調査から、日本の子どもは歴史を客観的にとらえる一方、自分自身や現在と歴史とを切り離してとらえている可能性があることを明らかにした。そして現代を生きる子どもたちの歴史学習を有意義なものにする1つの方策としては、「個人の歴史経験」が「学校歴史」へと統合され、過去と現在のつながりを理解させることを示した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to offer an explanation of students' understanding about past by focusing school history and students' personal experience. Sampling of students was taken from third, fourth, and sixth grade students in Kagoshima Prefecture. Classroom observations and student interviews indicated that students see the past objectively and fail to make extensive connections between past and themselves. The results of this study showed that it is important for students to understand connections between past and present. Integrating students' personal experience into school history curriculum will contribute to construct meaning of studying history.

研究分野：社会科教育学

キーワード：歴史理解 インタビュー 授業参観 小学校

1. 研究開始当初の背景

戦国時代をモチーフにしたゲームに人気があることや歴史好きの女性をさす「歴女」が流行語となったことは極端な例であるが、大人・子どもを問わず、ある特定の歴史への興味や理解を保持していることは多い。しかしこのような日常のメディアや他者との会話を通して形成される歴史(「個人の歴史経験」と呼ぶことにする)は、「学校歴史」(歴史授業で習得がめざされる歴史)への興味につながらないことや学校歴史の理解の障害になることさえある。

学校歴史を初めて学ぶ児童は、学校歴史の学習前にどのような歴史理解をしているのか、学習中および学習後の歴史理解にはどのような変化が見られるのか、それぞれの歴史理解に「学校歴史」と「個人の歴史経験」はどのように影響しているのかを客観的実証的に把握することは、児童の歴史理解を促進する歴史教育の実現に不可欠と言える。

日本において子どもの歴史理解を調査した先行研究は多くはないが、近年のその傾向は個々の子どもの歴史理解形成過程をミクロな授業場面に即して追跡し、より授業者の指導に即した視点で行われていること、子どもの認識、態度、思考等の複雑で多様なものの実態把握の困難性から、かなり具体的テーマに限定して実施されていることが指摘されている(吉川幸男 2001、有馬毅一郎 2001)。ある単元で目標とされる特定の歴史的思考や共感などに関して子どもの変容を調査する研究(西川浩・石田徳行・磯部修三 1971、吉崎朗 1990)は、子どもの歴史理解を教師が考える望ましい方向へ変えていくための具体的な授業改善を提案している。しかしそれらの研究も、教師が意図する歴史理解へ子どもが到達しなかった理由を教材や授業構成といった教師側の原因だけで説明するものが多い。しかし子どもは、教師から一方的に歴史を詰め込まれるだけの空の容器ではない。「個人の歴史経験」に着目して子どもの歴史理解のブラックボックスに穴を開けることによって、それぞれの児童が保持する「個人の歴史経験」をふまえた学校歴史の教授方略も明らかにできると考える。

国外においては、歴史認識(Shemilt 1980)や歴史的共感(Portal 1987)といった個別の歴史理解要素に関する調査研究だけでなく、それらを分析枠組みにしながらも多面的な研究方法を採用することによって、統合した歴史理解を明らかにしようとする質的研究が多く行われている(Levstik & Barton 2008, Seixas 1993)。特にさまざまな歴史的背景や文化背景を持つ子どもが学ぶ北米では、公的歴史(formal history、本研究では「学校歴史」)をその子どもにとって有意味にするためには、子どもが保持する自伝(students' autobiographies、本研究では「個人の歴史経験」)を公的歴史に織り込む必要性が指摘されている(Downey & Levstik 1991)。これは

文化背景や生活経験が多様化しつつある日本の子どもにも当てはまることが予想されるが、日本ではほとんど研究されておらず、実証されていない。

2. 研究の目的

そこで本研究では、児童の歴史理解の形成や変容の原因を、「学校歴史」(授業で習得がめざされる歴史)と「個人の歴史経験」(個人が保持している歴史)に注目して解明し、児童の歴史理解を促進する学校歴史教育のあり方を考察するものである。

具体的には以下3点を明らかにしたい。

- 1.) 学校歴史の学習前・学習中・学習後、児童はどのような歴史理解をしているか
- 2.) 1.)の歴史理解に、「学校歴史」と「個人の歴史経験」はどれほど影響しているか
- 3.) 2.)をふまえ、児童の歴史理解を促進する学校歴史教育はどうあるべきか

3. 研究の方法

本研究を4段階に分け、以下のような研究の焦点・方法を設定することで研究を実施する。

年度	段階	研究の焦点・方法
24年度	第1段階	(a)子どもの歴史理解に関する調査研究についての文献調査 (b)国外の調査研究の聞き取りや参加
	第2段階	(c)確定した調査手法にもとづき予備調査を実施 (d)調査手法と研究成果の検討
25～27年度	第3段階	(e)改善した調査手法にもとづき本調査を実施
	第4段階	(f)調査手法と研究成果の検討 * (e)と(f)を毎年度繰り返す
	第5段階	(g)子どもの歴史理解の形成と変容の論理の解明と検証

(a) 子どもの歴史理解に関する調査研究についての文献調査

子どもの(歴史)理解や態度に関する調査研究の手法およびその成果と課題を明らかにするために、日本や海外の社会科学教育学や教育心理学、歴史学などにおける先行研究の整理を行う。とくに本研究は、主として子どもの認知面に注視する教育心理学や歴史授業の現状を記述する歴史学の研究方法とは異なり、よりよい歴史教育の実現

を志向する教科教育学の調査研究であることを意識し、子どもが保有する「個人の歴史経験」と「学校歴史」の学習が子どもの歴史理解に及ぼす影響を明らかにする調査手法を確定する。本研究の目的と直接的に関係する先行研究としては Linda Levstik 教授（ケンタッキー大学）、Keith Barton 教授（インディアナ大学）、Bruce VanSledright 教授（ノースカロライナ大学）、Shelly Field 教授（テキサス大学）の研究を取り上げる。

(b) 国外の調査研究の聞き取りや参加

上述したとおり、子どもの歴史理解についての調査研究は近年米国の歴史教育研究者たちによって活発に行われている。その中心的な存在である(a)であげた研究者への聞き取りや実際の調査研究に参加することによって、その調査手法を習得するとともに、子どもの歴史理解に関する調査研究について意見交換を行い、研究成果の国際比較の可能性を探る。

(c)(e) 確定 / 改善した調査手法にもとづいた予備調査 / 本調査の実施

実際の小学校において予備 / 本調査を行う。なお、予備調査を実施する小学校の選定にあたっては、本研究内容を十分に納得した上で、本調査への協力も期待できる小学校と社会科担当教員に依頼する。現段階での調査手法は下のとおりである（Seixas 1993）。

—調査手法—

歴史授業前の子どもからの事前の情報収集

子どもの歴史理解や「個人の歴史経験」を確認する調査を行う。質問紙調査だけでなく、歴史理解や歴史経験に特徴のある児童に対しては、追加のインタビュー調査を実施する。

歴史授業担当教員からの事前の情報収集

歴史授業の雰囲気、教員の歴史授業に対する想い、調査授業の目標・内容・方法など、教員の側に立った分析観点を把握する。また教員とともに調査予定児童の確認を行う。

授業観察の開始（参与観察）

教室の前方と後方の2箇所にビデオカメラ、ICレコーダーを設置し、歴史授業を記録するとともに、授業を人為的に操作したり、介入したりしない参与観察を行い、フィールドノートを作成する。その際、子どもの歴史理解の表出（発言や記述）における歴史的情報の関係づけや意味づけに着目し、その子どもの歴史理解を把握する事例

を収集する。

子どもの歴史理解の表出についての分析・解釈と仮説の生成

収集した事例から、歴史理解の形成や変容の要因を分析・解釈し、仮説を立てる。とくに教師が意図しなかった（教師が“誤答”と考えがちな）子どもの歴史理解の表出が導き出された事例やそれが修正される事例は、子どもの歴史理解を明らかにしやすい事例となると考える（池野範男ほか2008）。

なお、は同時平行的に行うとともに、のインタビュー調査の質問内容も想定する。

子どもの歴史理解の形成や変容についての仮説の吟味

の仮説を検証するために、該当する子どもや教員にインタビュー調査や質問紙調査を行う。子どもにインタビュー調査をする際、解釈可能な回答が得られない場合の原因としては、子どもと研究者との信頼関係の欠如や研究者が適切な質問を行うことができなかった場合が想定される。これらを解決する手段としては、インタビュー調査を授業担当教員に行ってもらったり質問紙による調査に変更するなど考えられる。

(d)(f) 調査手法と研究成果の検討

上の調査から得られた研究成果は国内外の学会等で発表し、調査手法と研究成果の妥当性の保証や調査手法の改善を行う。

(g) 子どもの歴史理解の形成と変容の論理の解明と検証

研究成果から構築した論理について発表・意見交換を行い、調査範囲（調査対象や単元）の拡大や国際比較の可能性を探るとともに、日本の小学校歴史学習を改革する論理を考察する。

4. 研究成果

(a) 子どもの歴史理解に関する調査研究についての文献調査

文献調査では、子どもの歴史理解に関する調査研究の体系化を行っている米国の Linda Levstik 教授（ケンタッキー大学）と Keith Barton 教授（インディアナ大学）の共著“*Teaching History for the Common Good*”の翻訳を他の研究者とともに手がけ、分析の際の参考にするにことにした。たとえば偉人等の伝記に慣れ親しんだ子どもは、歴史的社会変化は偉人一人の思いや努力によって引き起こされたと考える傾向が強いことが指摘されているが、これは日本の子どもにも当てはまる傾向だと考えられ、本書は日本におけるデータを解釈する際の参考にする

ることが可能であると考えた。

(b) 国外の調査研究の聞き取りや参加

前述の Shelly Field 教授(テキサス大学)と彼女の元指導学生である Elizabeth Bellows 講師(アラバカン州立大学)の協力のもと、日米の小学生に共通の歴史的な質問を尋ねる面接法による調査を行った。具体的には、日本の小学4年生40名に対し、「学校歴史」としてはほとんど学ぶことのない「お金の誕生」について、「遠い昔の時代ではお金は必要とされていませんでした。それはなぜでしょうか」や「必要な物や欲しい物を交換することは難しいことです。それはなぜでしょうか」などを問いかけた。

米国の小学生と比較すると、日本の小学生はすぐに「わかりません」と回答する率が高かった。また、交換して相手のものとなってしまふものだけに着目し、「自分の気に入った物は手放したくない」など自己の感情にとられる回答も多いことが確認できた。

本調査によって子どもの歴史理解が明らかとなるようインタビューする方法や回答を分類し、子どもの認識段階を設定する分析方法を学ぶことができた。

(c) 確定した調査手法にもとづいた予備調査の実施

鹿児島県内の市立 A 小学校5・6年複式学級における歴史授業および附属 B 小学校学年別複式学級6年の歴史授業の参観と予備の授業分析を行った。両授業とも小単元「貴族の政治とくらし」(7~9時間)を学習範囲とし、児童の調べ学習によって進められた。児童と教師の言動を授業記録にして分析し、児童の歴史理解の表出場面を特定した。

児童の発言やワークシートの記入については、教科書や資料集の記述をそのまま発言・記入する様子が見られ、授業参観による児童の発言や記述の分析だけでは個人の歴史理解は明確にならないことがはっきりした。しかしながら奈良時代に聖武天皇が大仏を作った理由について、当時の社会情勢等を無視して「聖武天皇は大仏を作りたかったから作った」といった個人の願いを国家事業の要因にする発言も確認できた。

次に鹿児島県内の市立 C 小学校1クラス(40名)における小単元「貴族の政治とくらし」(9時間)の学習では、教科書や資料集を見る前に子どもたちが発言する場面や記述する場面を確保してもらうことで、パートン教授らが指摘する子どもの歴史理解の特徴の一端を確認することができた。具体的には、大仏の大きさを確認することで聖武天皇を「賞賛」したり、農民の税負担の重さを知り「非難」したりするなどの「道徳的応答」や、教師が「分析」として歴史的出来事の原因

と結果の説明を求めたにもかかわらず、歴史的出来事を羅列する「個人的充足」としての歴史理解が見られた。

(d) 調査手法と研究成果の検討

調べ学習において教科書や資料集の記述を発言したり書き写したりする様子だけからは、児童の歴史理解を把握することができない。授業担当教員と連携し、教科書や資料集を見る前に児童の歴史理解を把握することが可能な発問を投げかけてもらうなどの研究方法の工夫が必要であることが明らかになった。

また授業においては発言できる子どもは限られており、小学生の場合は書き言葉では自身の理解を十分表現できない場合も多いため、歴史的な絵画や写真を用いた面接における質問事項の開発が必要であることを確認した。歴史における子どもの自己認識、分析、道徳的応答、陳列展示など子どもの歴史理解の結果として表出される行動を促す質問や史資料の提示を工夫する必要がある。

(e) 改善した調査手法にもとづいた本調査の実施

小学校社会科において単元全体で歴史的な事物を学ぶ第3学年の児童と通史として日本の歴史を学び終えた第6学年の児童に着目し、歴史授業の参観やインタビューを行った。

第3学年については、鹿児島県内の市立 D 小学校複式学級の3年社会科「のこしたいもの つたえたいもの」の単元において授業参観と授業前後のインタビューを2名の児童に行った。祭りに踊り手として参加している児童は祭りの由来や作法など「個人の歴史経験」が豊かだったが、単元終了後のインタビューにおいては、祭りの意義を「昔からやっているから(やらなければならぬ)」と義務的にとらえていた。「学校歴史」として学んだ地域住民の連携をもたらすなどの祭りの現代的意味については説明できず、「個人の歴史経験」が「学校歴史」である祭りの意味の理解を促進するわけではない事例となった。

第6学年については、日本の歴史の通史学習として「学校歴史」を学び終えた鹿児島県内の市立 E 小学校児童5名に個別にインタビューを行った。歴史全般に対して関心がある児童は、「個人の歴史経験」として獲得してきた歴史的知識を「学校歴史」でも確認できることに学習の意味を見いだしており、メディアから間接的に得た「個人の歴史経験」と「学校歴史」が強く結びついていることを示す事例となった。また5名全員に尋ねた「歴史のなかで最も重要と考える事柄」については、アメリカの先行研究のように特定の

事柄に集中する傾向や日本の子どもが自分自身と「学校歴史」を結び付けている様子は確認できなかった。アメリカの子どもと比較し、日本の子どもは歴史を客観的にとらえる一方、自分自身や現在と歴史を切り離してとらえている可能性を指摘した。

(f) 調査手法と研究成果の検討

授業参観をふまえ、事後にインタビューする児童を決定するのが最善であるが、インタビュー時間の確保が課題となった。また授業参観も特定の单元だけで行うのではなく、年間に数回の参観することで、学校歴史による子どもの歴史理解の変化の要因が確定しやすくなると考えられる。

(g) 子どもの歴史理解の形成と変容の論理の解明と検証

「お金の誕生」のように「学校歴史」として扱わない歴史事象について尋ねた4年生の場合や体系的な歴史学習の初期の段階の6年生の場合では、自己の感情あるいは推測した歴史的人物の感情にもとづいた歴史の説明を行う事例が多く見られた。

一方、一通りの歴史学習を終えた6年生の場合、出来事の原因と結果を結び付けて歴史を説明しようとする事例が多く見られた。教科書や授業等の「学校歴史」の説明が児童に定着した結果であると考えられる。特に歴史全般に対して関心がある児童は、「個人の歴史経験」として獲得してきた歴史的知識が「学校歴史」でも確認できることに学習の意味を見だしており、「個人の歴史経験」と「学校歴史」が強く結びついていることを示す事例となった。

しかしながら祭りの由来や作法など「個人の歴史経験」が豊かな3年生が祭りの意義を「昔からやっているから(やらなければならぬ)」と義務的にとらえていた事例や歴史学習を終えた6年生が「歴史のなかで最も重要と考える事柄」について明確に答えられなかった事例のように、日本の子どもが「個人の歴史経験」あるいは現在の自分自身と「学校歴史」を関連させて考える様子が確認できない事例もあった。日本の子どもは歴史を客観的にとらえる一方、自分自身や現在と歴史を切り離してとらえている可能性がある。

以上の事例分析から、児童の歴史理解を促進する学校歴史教育のあり方を考察すれば、現代を生きる子どもたちの歴史学習を有意義なものにする1つの方策として、「個人の歴史経験」が「学校歴史」へと統合され、当時の社会や現在とのつながりなどのより広い視点から歴史を考察させ、過去と現在のつながりを理解させることが考えられる。今後の研究では子どもの歴史理解の事例を増やすとともに、子どもにとっての歴史学習の意

味が明確になる方策を実証的に示していく必要がある。

また事例の整理に時間を要し、研究期間内に学会発表や論文発表の準備時間を十分確保することができなかった。これらは今年度以降の課題として取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計1件)

Elizabeth Bellows, Sherry L. Field, Hiroko Taguchi, and Kazuhiro Mizoguchi "What Do Japanese and U.S. Children Think about Citizenship?", the 95th National Council for the Social Studies Annual conference, International Assembly(New Orleans, the U.S.), November 13, 2015.

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

田口 紘子(TAGUCHI, Hiroko)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号: 10551707